

2025. 7. 6 (日) 使徒23:6～11

23:6 パウロは、彼らの一部がサドカイ人で、一部がパリサイ人であるのを見てとって、最高法院の中でこう叫んだ。「兄弟たち、私はパリサイ人です。パリサイ人の子です。私は死者の復活という望みのことで、さばきを受けているのです。」

23:7 パウロがこう言うと、パリサイ人とサドカイ人の間に論争が起こり、最高法院は二つに割れた。

23:8 サドカイ人は復活も御使いも霊もないと言い、パリサイ人はいずれも認めているからである。

23:9 騒ぎは大きくなった。そして、パリサイ派の律法学者たちが何人か立ち上がって、激しく論じ、「この人には何の悪い点も見られない。もしかしたら、霊か御使いが彼に語りかけたのかもしれない」と言った。

23:10 論争がますます激しくなったので、千人隊長は、パウロが彼らに引き裂かれてしまうのではないかと恐れた。それで兵士たちに、降りて行ってパウロを彼らの中から引っ張り出し、兵営に連れて行くように命じた。

23:11 その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証ししたように、ローマでも証しをしなければならない」と言われた。

<説教>

使徒パウロに反対するユダヤ人たちは他のユダヤ人たちを扇動して、エルサレムの神殿にいたパウロを捕らえて殺そうとしました。それでエルサレム中が混乱状態に陥ったのでエルサレムの警備を担当していたローマ軍の千人隊長が駆けつけ、パウロの身柄は千人隊長の手に移りました。兵士たちによって兵営に連れて行かれる途中でパウロは自分を殺そうとしていたユダヤ人たちに向かって、自分に対して主イエス・キリストがなさったみわざとお語りになったみことばについて証言しました。一旦は静かになってパウロの話を聞いていたユダヤ人たちでしたが、主がパウロを遠く異邦人に遣わすと仰ったということを聞いたところでパウロの話を遮り、パウロを地上から除いてしまえと叫びだし、再び大騒ぎとなりました。そこで千人隊長は、パウロがユダヤ人たちから訴えられている理由を確かめるべく、ユダヤ人の祭司長たちと最高法院を集め、パウロを彼らの前に立たせたのでした。そこでパウロは彼らに向かって堂々と「兄弟たち。私は今日まで、あくまでも健全な良心にしたがって、神の前に生きてきました」と証言しました。そして、律法にしたがうことなくパウロの口を打つように命じた大祭司アナニアの誤りを指摘し、神のさばきを宣告しさえしたのです。どちらが被告なのかわからない、そんな状況でした。

さて本日の聖書箇所です。そんな最高法院に集められた人々の一部がサドカイ人で、一部がパリサイ人であるのをパウロは見て取り、叫びました。「兄弟たち、私はパリサイ人です。パリサイ人の子です。私は死者の復活という望みのことで、さばきを受けているのです」と(23:6)。すると〈パリサイ人とサドカイ人の間に論争が起こり、最高法院は二つに割れた〉のでした(7)。何故なら、〈サドカイ人は復活も御使いも霊もないと言い、パリサイ人はいずれも認めているから〉でした(8)。もちろんパウロはこのことを知っていたので6節にあることをわざわざ言ったわけです。起こった〈論争〉〈騒ぎは大きくな

り、ついにはパリサイ派の律法学者たちの中からパウロを強く支持する人々が現れるまでになってしまいました(9)。そしてこの〈復活も御使いも霊もない〉というサドカイ人と〈いずれも認めている〉パリサイ人との間の論争はますます激しくなり、ついにはそのおかげでパウロの身に危険が及びそうになったので、千人隊長はパウロを最高議会の中から〈引っ張りだし〉て再び自分の管理の下におかなければならなくなってしまったのでした(10)。

パウロをさばくために集められたユダヤ人の最高法院はこうして「自滅」してしまいました。いや、やはり神によってさばかれたと言っていいでしょう。先にパウロは議長である大祭司に神のさばきを宣言しましたが、その議長が率いる最高法院もまたこうして〈二つに割れ〉、機能不全に陥り、役に立たない、惨めな姿を曝(さら)してしまいました。

何故そうってしまったのでしょうか。それは十字架にかけられて死なれ復活なされた主イエス・キリストを彼らが信じていなかったからです。また、神を信じていると言いながら、その神がイエスを死者の中からよみがえらせなされたことを信じていなかったからです。「復活も御使いも霊もない」と言っていたサドカイ人たちについては、そもそも聖書をどう読んでいたのか、どういう神を信じていたのかという話になってしまいます。その、復活はないと言っているサドカイ人たちに対してイエスはかつて「あなたがたは聖書も神の力も知らないで、思い違いをしています。」と言っておられました(マタイ 22:29)。そして復活も御使いも霊もいずれも認めており、またこのときに限っては(?)パウロの側についた者が何人かいたパリサイ人たちにしても、かつてイエスから「わざわざ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは白く塗った墓のようなものだ。外側は美しく見えても、内側は死人の骨やあらゆる汚れでいっぱいだ。」と厳しく言われていました(マタイ 23:27)。彼らもイエスをキリストとは信じていませんでしたし、「イエスの復活」を信じていたわけではありません。それならいくら「死者の復活」を信じていたとしても意味がありません。「死者の復活」は「イエスの復活」があつてこそ意味のあることなのです。

主イエスは弟子たちに「わたしは狼の中に羊を送り出すようにして、あなたがたを遣わします。ですから、蛇のように賢く、鳩のように素直でありなさい。」と言われました(マタイ 10:16)。パウロはそのように考え、語りました。それは聖霊に導かれてのことでした。

「話すのはあなたがたではなく、あなたがたのうちにあつて話される、あなたがたの父の御霊です。」とイエスは言われました(同 20)。こうしてパウロは聖霊の力によって自分—パウロ自身というよりもむしろパウロが証するイエスの福音—toに反対する人々の誤りを見抜くことができました。それはパウロが普段から、いつも聖霊の導きを祈り求め、御子イエス・キリストとの親しい交わりの中に生きていたからです。

さてこうしてパウロは再び千人隊長の手によって兵營に連れて行かれることとなりました(23:10)。それは千人隊長を用いてパウロのいのちをユダヤ人たちの手から守ろうという主イエスのみこころでした。

〈その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証したように、ローマでも証しをしなければならない」と言われた〉(11)。エルサレムでのこれまでのパウロの言動は「わたしのことの証し」だったと主イエスが認めてくださいました。パウロにとってはそれで充分だったでしょう。パウロの周りに起こった〈大騒ぎ〉、〈混乱状態〉、〈暴動〉、自分に対する怒鳴り声、殺意、そんなもの

に対してパウロは堂々と対峙していましたが、それでも人間です、心騒ぐことが全くなかったとは言えないでしょう。もちろんそんな中でいつも祈りつつやってきたことでしょう。そんなパウロに主がみことばをもって励ましてくださいました。〈今日まで、あくまでも健全な良心にしたがって、神の前に生きてきました〉(1)との生き方を続けるようにと励ましてくださいました。ローマでも「主イエスの証し」をするよう、主がローマまでパウロとともにいて、守り助け導いてくださるとのお約束でした。

私たちも主イエスの証人として、主によって遣わされ置かれている場所で、〈神のことばとイエスの証しのゆえに〉(黙示録 1:9)起こる大小の騒ぎ、混乱、怒鳴り声などの中で、主のみことばと聖霊による励まし、助け、導きをいただいて歩んで行きたいと祈り願います。主イエスに反対する人々の誤りを正しく見抜いて、正しく相応しく対応していくことができるようにと願い祈ります。